
犯罪的追尾者の恋

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犯罪的追尾者の恋

【NZコード】

N4928D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

気になると人でも物でも関係なく徹底的に調べたくなる そんな主人公がある日一目惚れをした。謎の多い気になるその相手、朝倉香寿の正体は・・・

一目惚れした

僕は一目惚れなんて信じていなかつた。

人間は外見じやない、中身だから。

そう思つていた。見ただけで人を好きになるなんてと。

一週間前までは。

実体験してしまつては、もう否定できまい。理屈も何も無いのだから。

本当に、野生の勘とでも言うのだろうか、そういう直感らしきもので、ふあつと心ごとどこかに持つていかれてしまう感覚。

これがまだ恋かどうかは分からなければ、とにかくその人に今までには無い感じを覚えたのは確かだつた。

朝倉香寿

それが一目惚れした相手の名前。

すとーかー？

「えっと・・・たしか僕たちと同じ大学の2年生で、毎朝6時半の電車に乗ってる。好きな食べ物は蜜柑とシーザーサラダ。嫌いなものはチヨコレート。好きな色は黒とミントグリーン。・・・今のところはまだここまでしか分かつてない・・・」

僕があ・・・とため息を吐くと、田の前に座つた僕の親友も大きくため息を吐いた。

僕のはショックの溜め息。親友は呆れたときの溜め息。

「お互い一言も喋つてないのにそこまで知つてたらもう十分じゃない。」

ストローに口を付け、最後のオレンジジュースを飲み干す。

親友は立ちあがり、少し離れたところに置かれていたボトルに手を伸ばした。

「そーだよ。ていうかさ、いつつも思つてたんだけどあんたそんな情報どつから入手すんの？」

ボトルのキャップを外し、僕の空いたグラスにとほとほと注いでくれる。

「まさか・・・「ゴミ」とか漁つてないよね？！」

「それはしない。僕のプライドが許さないもん。」

他人の「ゴミを漁るなんてとんでもない。

僕の応えに親友は再度溜め息を吐き、椅子に腰掛ける。

「じゃあ・・・どうやつて？」

僕は一口オレンジジュースを飲んでから、「んー・・・」と前置きした。

「そうだな・・・名前は、同じ大学だから知り合いに聞いた。で、好きなものとかは、朝倉さんの友達が話してる中から知った。あ、そうだ。朝倉さんの誕生日も言つてたな・・・たしか4月1日。書

いとがなくちゃ・・・

椅子の背にかけておいたショルダーバッグから手帳を取り出しメモをする僕を見て、親友はグラスに口を付けながら「ふ〜ん」と言つ。「・・・君ね、そういうの世間でなんて言うか知つてる?」「ジューースを一気に飲み干し、親友はその細くて長い綺麗な人指し指を僕に向けた。

「人を指さしてはいけません~」

僕がその指を持つと、親友は空いた手を額にあてた。

「まじめに訊いてる。君、犯罪者になりかねないよ?君みたいなのをね、ストーカーってい・う・の!」

僕の手から逃れた指で、親友は僕の額をつんづんと突つつきながら僕に迫ってきた。僕は額を擦る。

「しつれーだな~・・・僕はストーカーじゃないよ。」

「今までのことも考え合わせるとあんたには十分その要素があります。あたしゃあいつあんたがゴミ漁りを始めるかと思うと不安で不安で・・・」

後半少し演技がかつた口調で言つと、親友は立ちあがり、カーテンを閉めに窓辺に近づいた。

僕はそんな親友の背中を見ながら、ジューースを飲む。外国産のオレンジジューース。甘酸っぱくて美味しい。

「・・・その癖、直したほうが良いような気がする。」

しばらくの沈黙を経て、不意に親友が口にした言葉に、僕は無意識に唇を尖らせてしまった。

「やつぱり・・・さ・・・こんな」時世だし・・・不審者扱いされて叶う恋も叶わなかつたら、僕は辛いよ・・・?」
親友として。

振り返つて微笑む親友の顔は、背後からの残つた太陽光に照らされ陰になる。

僕はそれを見てから、立ち上がり台所にグラスを洗いに行つた。分かつてゐる・・・ありがと。

声は出なかつたけれど、僕は親友に感謝した。

君と仲良くなれたのはこの癖のおかげなんだけど・・・と思つたけれど、それは顔には出さないよつにした。

何でも気になつたことは、人でも物でも関係なく気が済むまで調べる。

それが昔からの僕の癖だった。

『またやつてる・・・』

夜近くまで僕が隣町や知らない町の電柱や建物の陰に隠れるように凭れていると、よく親友が見つけてくれたものだ。

『君も僕に気づかれずに着いて来るの上手くなつたね。』

僕が笑うと、親友はよく苦笑いをしてから笑顔を返してくれた。

『そりや そうでしょ。 もつ何年もの付き合いなんだから、馴れもしますよ。 てかさ、 高校生にもなつてそういうのはさすがに止めたほうが良いような気がするよ? 仮にも君、男なんだからさ。 女性と違つて不審者扱いされやすいの。 僕たち男つてのは。』

『それもそうかもね。』

『笑い事じやありません。 僕のときは、相手が僕だったらまだ良かつたものの』

『感謝感激でござりますよ彼方さまへ

春紀へ!

『だつてさ、気になると調べたくなるんだ。 徹底して、知りたいんだよ。 この次の瞬間にも死ぬかもしれないのに、知らないで死んだら僕は死んでも死に切れないね。』

『そう言つて図書館や自室に籠もりつきりでろくでじ飯も食べなかつたり、この寒空の中ですつと外に出られてたらたまたまんじやないよ。 はい。』

『ん?』

『暖かいの。 寒いでしょ?』

『おつ。 サンキュー』

『ま、とつあえず頑張れ。』

『彼方・・・君応援するか止めさせるかのどちらかにしなよ。』

『それ君が言う台詞じゃないから。』

・・・彼方もいい奴だよな・・・

僕は缶コーヒーを片手に、キャンバスの中にあるベンチに座つてい
た。

もうそろそろ朝倉香寿の通る時間。

朝倉香寿は謎が多い。

なんだか、気になる。すごく気になるのだ。

僕は不思議なオーラを纏つた人やどこに行くのか気になつた人の後
を着いていつてしまつ。

世の中はこれをストーカーと言つらじいけれど、それとは少し違う
気がする。

ただついて行つただけだし、近所で話してゐる人の声が聞こえてきて
それをきつかけに知つたりしただけだし、しつこく付き纏つたこと
もないし、不法侵入をしたこともゴミ漁りをしたことも無い。

今までそんなことをしなくてだいたいのことは知れたり、それ
で満足だつた。

だけど、朝倉香寿は違う。

なんだか本当に心ごと持つていかれてしまつたのだ。

どうしてだろ？・・・自分でも変だとは思うんだけど・・・
だけど事実だ。

朝倉香寿は、いつも遠巻きにしか見えなくて、近づこうとする
かしら邪魔が入つたりして見失うし、相手もなぜかふと消えてしま
う。

まるで僕の行動を予測してゐるかのよつに。
だから余計に気になる。負けず嫌いも手伝つて、何が何でも知りた
い。

「はあ～るう～きい～」

背後から声が聞こえてきて、驚いて振り返ると、親友・彼方がいた。
「あれ、もう終わつた？」

「うん。」

「お、ちゃんと暖かいの飲んでるじゃん。」

彼方はよろしいと言つて笑い、僕の隣に座る。

「飲み物で良かつた。僕今日は肉まん持参だから、被らなかつたな。

微笑んで、彼方は持つていた紙袋から湯気立つ白い肉まんを取り出し、「はい」と渡してくれた。

「朝倉さん待ちですかい？」

僕がお礼を言つて食べ始めて少しして、彼方が僕が見ているのと同じ方向を見た。

「ああ。今回のヤマはでかいぜ兄弟。」

2人でしばらく笑つてから、「ホントに苦戦してるっぽいね、犯罪的追尾者さん」と明るく言つて、彼方が肉まんを頬張る。

「はんざいてきついびしゃ？」

「君のことだよストーカーくん」

上目遣いで僕を見上げながら僕の目の前で突き出した人差し指をくるくると回る。

これは彼方の癖なのだ。ずっとそう。“君”とか言つ時に必ず人差し指を向けてくる。

「やめなさいって言つてるでしょ。」

僕は笑つてその手をどけて、肉まんを食べかる。紙を丸めてポケットに入れた。

「ごちそーさま。・・・それにしても遅いな朝倉香寿。」

僕が建物の方をじつと見ながらぼそつと呴くと、彼方が言つた。

「ね、朝倉香寿つて、どんな人？」

「え・・・? それつい昨日言つて」

「それもだけどー、どんな感じの人とか、何科の人間なのかとか、初めて見かけた場所とか。

その言葉を聞いて、僕は呻つた。

「えー・・・と・・・何科の人・・・何なんだろうね?いつも

よく見失うし、初めて見たのもあの建物だつたから、そのどこかつていうのは分かつてゐるんだけど……。あ、そういえば君もあの建物だよね？」

「……まあね」

彼方の表情が一瞬曇る。僕は氣のせいかなと思ひ見過ごした。

「じゃあ、見たこと無い？髪は・・・えつと・・・焦げ茶かな。襟足とかけつこう長めなんだけど・・・細身で、服装はいつもシンプルかな・・・大きな目の中のセーターに「チーム」とか。

僕がそこで彼方を見ると、ふと、たつた一度だけみた朝倉香寿の正面の顔と被つた。

彼方は眉を剃つていて短いし髪も前髪が長くてツンツンに立てているけれど、ほとんどそつくりに近い。

僕は思わず「あ」と言つた。

「ん？」

彼方が首を傾げる。僕は慌てて首を振つた。

「いや、えつと・・・うん・・・なんでもないよ・・・」

「そういえば、あいつら言つてたよ。」

あいつら？

今度は僕が首を傾げると、彼方は「いつものメンバー」と言つた。いつものメンバーとは、クラスは違うけど色々な活動を通して仲良くなつた友達のことだ。

僕と彼方の共通の友達は、3人ほど。朝倉香寿の名前を聞いた奴も、この中にいる。

彼方はけつこう人懐っこいところがあるので、初めての時は見た目で多少退かれもするが、その魅力はすぐに發揮され友達ができる。

「なんて？」

「ん。なんか、最近なかなか会えなかつたし、メシでも食いに行こつて。」

彼方がにこつと笑う。

僕はその笑顔に、思わず見惚れた。

と、建物から何人かの生徒がぞろぞろと出てくる。僕はそちらを向いて、思わず立ち上がった。

「おっ、2人ともいたいた！」

目を凝らすが、それらしき人物はいない。

別方向から知つた声が聞こえた。さつき彼方が言つた、『いつものメンバー』たちがこちらへ歩いてくる。

「彼方から聞いた？」

「うん。ご飯食べに行くつて」

「ああそつちもだけど・・・」

1人がちらつと彼方を見る。僕もつられて見ると、彼方は少しムツとしたような顔で彼を見た。彼は「あ、まだ」とかなんとか口だけで言つて、再び僕を向いた。

「なんでもない。何食べたい？春紀と彼方の誕生日、2人分兼ねで悪いんだけど・・・」

誕生日・・・

ああそうか・・・今日は3月31日で僕の誕生日だった。それで明日は彼方の

「・・・？どうした春紀、ぼーっとして・・・？」

話しかけてきた彼が僕の肩を軽くゆする。

僕は彼方を振り返った。

彼方が驚いたように僕を見る。

「・・・バレちゃったかな・・・？」

別の1人がふふっと笑う。

「あー、かもな。」

「大変だ大変だ。」

他の2人も笑う。

僕は彼らを一度見て、それから信じられなくて彼方を見た。

「もしかして、分かった？」

彼方が少し困ったように微笑む。

じゃあ・・・それじゃあ彼は・・・

「朝倉香寿。好きな食べ物は蜜柑とシーザーサラダ。嫌いなものはチヨコレート。好きな色は黒とミントグリーン」

「髪は焦げ茶で襟足が長め。細身で、服装はいつもシンプル。」

「大きな目の中のセーターにデニムとかね。」

3人が彼方の横に並ぶ。

僕は口をあけるが声が出ない。

「・・・朝倉香寿は僕だよ。」

彼方が言った。確たる証拠。

僕は驚きすぎて心臓がどきどきと早くなるのを感じた。

「じゃあ彼方、春紀、俺ら図書館言つとくから、後から来いよ。」

そう言つて3人は僕らから離れていった。

少しの間、沈黙が流れる。

「・・・怒つてる?」

彼方が恐る恐るといった感じで僕を見てきた。

「お、怒るも何も・・・僕はそんな・・・何がなんだか・・・・・・」

「あいつら以外にも、手伝つてもらつた。君のストーカー癖を治して欲しくて・・・」

彼方はゆっくり話し始めた。

「ストーカーってほど、行き過ぎてはないかもしれない。だけど、やつぱり・・・物はともかく、人はやめた方が・・・いいと思う。それに・・・」

彼方がベンチに座る。そして、僕が置いた冷たくなつたコーヒーの缶を手に取り、弄ぶ。

僕も、隣に座つた。

答えを待つが、彼方はなかなか進まない。

風がまだ少し冷たくて、遠くのほのかに明るい空に、黒く鳥の影が見える。

「・・・人を追いかけられるの・・・イヤだった・・・・・・」

ようやく、彼方が口を開いた。僕は口を挟まなかつた。

「だつて……なんか……分からぬけど……春紀が気になる人と……その……僕の時みたいに接点ができちゃつたらって思うと……怖くて……」

寒さのせいか、他の何かのせいか、彼方は少し震えている。僕はあまり寒いと思わなかつたので、自分が着ていた上着を彼方にかけた。

彼方は小さく「……ありがと」と弦くよづに言つた。僕は頷く。

「……それで？」

そして先を促した。

彼方の耳が赤くなつてゐる。そんなに寒いのだろうか？

「……でも……だから……あの……僕が変装なんてしまつても、目にも止まらないかもつて……言つたんだけど、あいつらが……やつてみろつて……」

変装したつてあんまり変わらないし。

彼方の声がだんだん小さくなつていき、ふつと消えてしまった。

僕はしばらく待つたが、どうしてもそれ以上は言えないようだ。

「……僕が朝倉香寿に興味を持つたのはね、」

僕がいきなり話し始めると、彼方は下つていた形の良い頭を少し上げた。

彼方の着ける香水がふわっと香つた。

「君に似てたからだよ。」

彼方の頭がさらに上がる。

「似てるどころかそつくりで、近くで見たことは無かつたけど、一瞬だけ見たことがあつたんだ、正面。君だと思つて、だけどなんか髪型も顔の感じも全般的な雰囲気が違くて、よく似た人がいるもんだつて思つたの。」

僕はそれが同一人物だと知つてゐる今、自分のその時の考えが可笑しくて思わずふふふと笑つてしまつた。

何を考えてたんだろう僕は、大切な人の簡単な変装も見破れなくて、親友失格かな。

そこまで考えると、なんだか急に悲しくなった。

どうして気づかなかつたんだろう。本当に好きな食べ物だつて、好きな色だつて、知つてゐるはずだつた。親友だから誰よりも彼方を知つていたはずなのに、誕生日にも気づかなくて、僕は・・・

「ごめんね。」

彼方が僕を見る。僕は視線の端にそれを捉え、だけどそつちに顔を向けることはできなかつた。

向けてはいけない気がした。

本当にちらりとしか見えない彼方が、泣いているよつな顔をしでいるから。

「なんで謝るの？」

彼方の声はやはり湿つていた。

「だつて・・・大切な人の変装見破れなくてさ・・・なんか、ダメだなーつて思つて・・・さ・・・」

僕もなんだか泣きそうになつてきた。

どうしてだらう。こんなに悔しい。こんなに悲しい。

僕は彼方を知らない。彼方は僕のためにしてくれたこと、僕は何も知らなくて、でもあいつらは知つていて・・・

悲しい・・・

「気になつてくれるなんて・・・思わなかつたんだよ・・・？」

彼方が小さな声で言つた。

「気になつてくれるなんて・・・思わなかつた・・・」

相変わらずの涙声で、僕はその音に胸が締め付けられた。

「気になるどころか・・・」

好きになつてた

「好きになつてたよ。」

僕は思つたままを言つた。目を擦つていた彼方の手が止まる。

一気に夜が迫つてきて、あちらこちらで電気が灯り始めた。

ベンチの近くにも一つあり、それがぱつと点くと同時にこぢりを向いた彼方の目がきらきらと光つていた。

頬を真っ赤にして、少し長い睫毛を濡らして、きょとんとした顔をしている。

「僕は一目惚れなんて信じてなかつたけど、君を見て、心がどつかに持つてかれた気がした・・・。だけどね、朝倉香寿なんて存在しないつて分かつて、それが君だつて知つた今もその気持ちは・・・。好きだつて気持ちは変わらないんだ。」

僕はなぜかすらすらと気持ちを言えた。

こんなに囁まずに言葉を発することができたのは初めてだ。しかし

言つた直後に緊張が襲つてきて、痛いくらいに鼓動が早くなる。

「変な話だよね・・・ずっと傍にいてくれたのに、一目惚れつて・・・

何も言わない彼方との沈黙が怖くなつて、僕は慌てて言葉を付け足した。

彼方は微かに首を横に振る。

「・・・春紀が好きだよ・・・」

「・・・？」

耳を疑つた。声が掠れていたし少し離れたところを一団体が通つたから、一瞬今の言葉が彼方の口から聞こえたものか分からなかつた。「だから・・・人にふらつて着いていつたりするのが不安で、いつも無意識に跡を追つてた。」

ふふつとそこで、久しぶりに彼方が笑う。

「僕もストーカーみたいなものかな・・・春紀の」

僕はそんな彼方が愛おしくなつて、ぎゅっと抱きしめた。

彼方が「わあっ」と声をあげる。

「な、なななに？なにっ？」

「ありがとう」

小声で言つたはずの僕の言葉が聞こえたのか、暴れていた彼方がぴたつと止まる。

「僕の好きは親友より上だけど・・・良いですか？」

身体を離してそう言つと、彼方の顔がますます赤くなつた。

・・・・・
「はい」

消えてしまいそうな返事が聞こえた後、「よろしく・・・お願ひします・・・」と、可愛らしき返事が返ってきた。

小柄な彼方がますます小さく見えて、僕は思わず頭をかしがしと撫でた。

恥ずかしいのを紛らわすためにお互に少し笑にあつてから、あいつらが持つてゐる図書館に向かつた。

たっぷりお灸を据えよつと思ひ。

感言の言葉に
心取ておけり

「春紀 つ

すぐ耳元で声が聞こえて、僕は飛び上がった。

夏の日差しで少し日焼けした彼方は、Tシャツの襟元を片手でぱたぱたさせながら空いた手を腰にあて、僕を呆れたように見ている。

「・・・びっくりした・・・・・彼方か・・・」

「もう、また図書館に籠もつて。せつかくの休みなのにもつたいいないでしょ？」

だつてーと僕が言つと、彼方は困ったような顔で微笑んだ。

「だつてこの小説の作者が気になつてしかたないんだ。」

僕は一冊の文庫本を掲げる。

「ねえ、お願ひつ。あともう少しでここ読み終わるから待つて？こ

こ読んだらすつきりするはずだから・・・」

「そう言つて今度はその作者の出身地のこととか本の中こよく出てくる紅茶の原産地とか調べ始めるんでしょう？」

「う・・・・」

図星。

「しようがないなー。時間を区切つてしま jóうね？」

笑いながら、彼方が隣に座る。

しそうがないと言つた割には、彼方も興味心身で本を覗いてくる。

かわいくて、僕は彼方の小さな頭を撫でた。

「あとでアイス奢つてあげる。」

「マジで？！じゃあバニラね！あ、やつぱりラムレーズン！」

「はいはい。」

小声でのやり取りを終えて、僕は彼方の頬に軽く唇をつけてから本に戻つた。

真っ赤になつてこちらを見る彼方を、わざと見ないフリをする。

今の僕は気になつたことを調べるよりも、大好きな人のことを知り

たいから。

大好きな人を、何より大切にしたいから。

犯罪的追尾者の恋（後書き）

犯罪的追尾者＝ストーカー
ストーカーの恋が書きたかったのですが、思ったよりそれらしくなりませんでした・・・（苦笑）
最後までお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4928d/>

犯罪的追尾者の恋

2010年11月10日14時20分発行